

## 世阿弥の佐渡配流と『金島書』

石井悠加

はじめに―世阿弥の佐渡配流と『金島書』

永享四年（一四三二）、嫡男の元雅の急死が晩年の世阿弥の人生を大きく動かした。同五年には將軍義教の寵愛を受けていたかつての養嗣子である元重が元雅の跡を継承する。そして同六年五月に世阿弥は佐渡へと送られている。

この配流後に世阿弥が作った小謡集として伝わる『金島書』の八つの小謡は、佐渡配流という実体験に基づき、道行き文や紀行文、述懐・哀傷などといった、配流の立場となった能作者の手によるにふさわしい趣向をそれぞれに持っている。その制作の目的は、赦免嘆願のための作品という型を利用して、作者と役者とが一体となった新たな能の可能性を切り拓くことにあったのではないか。本稿では『金

島書』の詞章の中から、作者と一体化した作中主体による能を成立させるための工夫を探りたい。

### 一、『金島書』制作の事情と構成

世阿弥配流の理由は不明である。竹本幹夫氏<sup>(1)</sup>によれば、この処分は將軍足利義教の意向によるものであり、この配流の背景には、元重の大夫継承との因果関係も考えられるだろうという。また今谷明氏により、大和永享の乱に着目した、越智維通の謀叛への連座を世阿弥配流の原因とする説が提示されている<sup>(2)</sup>。

世阿弥が永享六年五月四日に配流先の佐渡へ出立したことは『金島書』の冒頭に示されており、小謡集『金島書』が翌々年に完成したことは、「永享八年二月日 沙弥善芳」

という奥書により確認される。しかし世阿弥の配流後の消息、帰洛の事実については確認がとれない。『金鳥書』以外の配流後の史料には、昭和十六年に発見された娘婿金春禪竹宛の「六月八日付禪竹宛世阿弥書状」があり、配流翌年の永享七年のものかと推定されている。

『金鳥書』を世阿弥はどこでどのような目的で制作したのか。成立を配流中のこととした黒田正男氏は、近世の『四座役者目録』<sup>(4)</sup>中の世阿弥の佐渡帰還の理由に注目した。

公方之御意二違、佐渡ノ國へ配流セラレ、被居ル中ニ七番謡ヲ作ル。上方ヘウツシ来リ、世人ニ流布ス。忝モ帝王ノ御目ニ掛リ、七番ノ中、取分キ《定家かつら》謡ノ作り様御感被成、佐渡ニ有ハ不便ナルトテ、公方ヘ急ギ呼返サレヨト勅定ニヨリ、佐渡ヨリ帰りタル人也。

足利義教の意に背き流刑に処された世阿弥が七つの謡を佐渡で作った。都に流布したそれらのうちの《定家かつら》がとりわけ後花園天皇の心を動かし、その結果、赦免帰洛が叶ったのだという。

『四座役者目録』の記載とは異なり、『金鳥書』に《定家かつら》に該当する謡はない。そして『金鳥書』の八編の謡の作中主体は世阿弥本人であり、自身が今まさに直面す

る配流の状況を題材としている点で特異な謡である。そうした特異性を持つ一方で、『金鳥書』は八つのそれぞれ異なる趣向があり、また吉田東伍氏の翻刻した孤本である松廼舎文庫の写本に、「歌う」「只うた」などの指示があったことから「原案は在島中につくったとしても、それを謡曲に仕立てたのは帰還後」とした村井康彦氏の推定もある。『金鳥書』は上演を想定した形で伝わっているのである。<sup>(5)</sup>

世阿弥が、帰洛後に自身で上演することを企図して制作したものとすれば、八つの小謡という作品の構成についても首肯できる。晩年の亡父に「まことに得たりし花」(『風姿花伝』)を見たという世阿弥は、演者自身の年齢・容貌が観衆に与える印象を意識し、「花」とは生涯にわたる練熟によって得られるものとした。『金鳥書』奥書の年の世阿弥は七十四歳を迎えている。佐渡で制作したものが小謡集だったのは、それらを自身の手によって披露する体力面を計算してのことだったのではないだろうか。

またそれらの小謡は、連作でありつつもそれぞれに異なる趣向を持っている。最初に、佐渡の配所へ至るまでの旅路が謡われる。永享六年五月四日に都を立ち、翌日に若州小浜にたどり着く。入江の有り様と、流謫の身の感慨を謡い(①《若州》)、そして陸地を離れて、五月下旬に佐渡の「大

田の浦」に着くまでの日本海の旅路で見た、白山や能登半島などの雄大な光景を謡う(②《海路》)。やがて佐渡に到着し、大田の浦で一泊した後「笠取山」や「長谷観音」などの都で耳なじんだ名に出会い喜びながら山路を辿り、新保万福寺で薬師仏を礼拝し、都を離れて「配所の月」を見る感慨を謡う(③《配処》)。

佐渡に落ち着き、過去の流刑者の旧跡を訪れた経験を元に二つの謡が続く。八幡宮の境内でだけホトトギスの鳴き声が聞こえない不思議について世阿弥が宮人に尋ねたところ、かつて京極為兼が配流の折に「鳴けば聞く聞けば都の恋しきにこの里過ぎよ山ほととぎす」と詠んだためだという。この逸話が世阿弥自身の望郷の念を導く(④《時鳥》)。かつての順徳院の配所「泉」で院の不遇に涙し、院の極楽浄土への往生を確信する(⑤《泉》)。ここまでが世阿弥の永享六年の配流当初の経験に大きく基づく謡である。

残る三つは神仏を主題とする。永享七年春に「十社」に参詣し、小謡を奉納したことを謡い(⑥《十社》)、国土生成神話における佐渡、白山権現が影向する佐渡金山山などを礼讃する(⑦《北山》)。大和国興福寺で行われる薪の神事について謡い(⑧《薪の神事》)、最後に奥書として「これをみん残すこがねの島千鳥跡も朽ちせぬ世々しるしに」

の和歌一首と「永享八年二月日 沙弥善芳」の署名が置かれている。

まず『金鳥書』の古典引用の効果について考えるため、⑤《泉》に注目していきたい。

## 二、《泉》——和歌による構成

順徳院の配流を題材にしたこの小謡の詞章は、流離・零落に関わる和歌の引用によつて緊密に織りなされている。

又西の山本を見れば、人家薨を並べ都と見多たり。泉と申ところなり。これはいにしへ順徳院の御配処也。しかれば御製にも、(A)限りあれば萱が軒端の月も見つ知らぬは人の行末の空。げにや十善万乗の御聖体、さしも余薫の御陰とて、その名も高き山桜、梢の花と栄えん、雲居の春ののどけさも、いまさもして(B)天離る、鄙の長路の御住まひ、思ひやられていたわしや。所は萱が軒端の草、忍の簾絶えくも也。夕立落つる庭たづみ、これもや泉なるらん。

(C)下くぐる、水に秋こそ通ふらし、く、結ぶ泉の、手さへ涼しき折々に、御衣の袂や萎れけん。げにや(D)人ならぬ、岩木もさらに悲しきは、美豆の小島の秋の夕暮と、詠めさせ給しも、御身の上となりにけり。

(E) 櫛摘む、山路の露に濡れにけり、暁起きの墨染の、袖も同じ苔筵の、たれぞ錦の、御褥ならんいたわしや。

(F) 薪こる、遠山人は帰る也、里まで送れ、秋の三日月も雲の端に、光の陰の憂き世をば、君とても逃れ給はめや。さてこそ (G) 言ふならく、奈落の底に入ぬれば、利利も首陀も、変らざりけるとなり。げにや

(H) 蓮葉の、濁りに染まぬ心もて、泉の水も君すまば、涼しき道となりぬべし、く。(《泉》全文<sup>11</sup>)

ここで引用されている七首の和歌の作者と典拠は次の通りである。

(A) …後鳥羽院〔後鳥羽院遠島百首〕第三類本)

(B) …柿本人麻呂〔万葉集〕、「新古今集」羈旅・八九九ほか)

(C) …中務〔和漢朗詠集・夏〕、「新千載集」・夏・三〇二ほか<sup>12</sup>)

(D) …順徳院〔順徳院百首〕三九、「続古今集」雑上・一五七)

(E) …小侍従〔正治初度百首〕「山家」題、「新古今集」雑中・一六六)

(F) …順徳院〔順徳院百首〕秋四〇、「玉葉集」秋下・六三六ほか<sup>13</sup>)

(G) …高岳親王〔俊頼髓腦〕「宝物集」「沙石集」「十訓抄」

延慶本平家物語、「源平盛衰記」ほか)

(H) …遍照〔古今集〕夏・一六五、「和漢朗詠集」・夏ほか)

(A) を世阿弥は順徳院の佐渡での詠歌として認識したようだが、実際には後鳥羽院の隠岐配流後の詠で、「遠島百首」諸本のうち第三類本の特有歌である(新編国歌大観解題参照)。これは配流先の佐渡でふれた誤伝というより、後述の《時鳥》に引用される為兼詠と同じく、京都ですでに生じていた誤伝であった可能性が高いだろう。(B) は人麻呂詠「天離る雛の長路を漕ぎ来れば明石の門より大和島見ゆ」の初句・二句で、ここでは海に閉ざされた鄙の地への順徳院の不遇の遷幸を表現するために用いている。(C) は、夏の暑さを忘れさせる泉の清涼さを表現した中務詠で、その涼しさは、(H) 遍照詠「濁りにしまぬ心」を保った順徳院の住まう地の泉が持つ涼しさであり、極楽浄土への道である「涼しき道」へと繋がる。そして(D) (F) 詠は、都の藤原定家と隠岐島の後鳥羽院へ送られた順徳院詠そのものである。

(E) は、本来は小侍従の『正治初度百首』「山家」題詠歌で、仏前に供える櫛を山中で摘み取る出家者を詠んだものだが、この和歌は『平家物語』灌頂巻の大原御幸に、山の花摘みから戻った建礼門院を叙述する際に取り入れられ

ている。

女院は「さこそ世を捨る御身といひながら、いまか、  
る御ありさまを見えまいらせむずらんはづかしさよ。  
消もうせばや」とおほしめせどもかひぞなき。よひ  
くごとの関伽の水、結ぶ袂もしほる、に、暁をき  
の袖の上、山路の露もしげくして、しほりやかねさせ  
たまひけん、……

世阿弥は覺一本系を中心とした複数の語り本系平家物語  
を作品に取り入れ、また平曲を日頃耳にする環境にあり、  
平曲の大原御幸の節付に關して『申樂談儀』別本聞書にも  
世阿弥の言及がある。『金鳥書』のこの小侍従詠の引用にも、  
建礼門院の隱棲を想起させる意図を汲み取るべきだろう。

(G) 詠は高岳親王が空海へ詠みかけた歌として諸説話  
集や『平家物語』延慶本、『源平盛衰記』、弘法大師關連の  
諸文献などに載るもので、奈落の底では身分の差に意味は  
ないとする。世阿弥作『錦木』にも引用された表現であり、  
高岳親王もまた政争により太子を廢され、天竺への旅半ば  
で没する運命を辿った貴人であった。

《泉》は、誤伝も含めた順徳院詠を中心として構成され、  
そこに建礼門院、高岳親王という流離の貴人を想起させる  
和歌が埋め込まれている。ここで世阿弥は「げにや人なら

ぬ、岩木もさらに悲しきは、美豆の小島の秋の夕暮と、詠  
めさせ給しも、御身の上となりにけり」と、過去の自身が  
詠じた風景の中に置かれることとなった順徳院の面影を浮  
かび上げらせているのである。

### 三、《若州》——謡曲の瀟湘八景引用

さて、《泉》の他にも、『金鳥書』には随所に「配流」を題  
材とした様々な古人を連想させる修辭が凝縮されている。  
石井倫子氏は、『金鳥書』を制作した世阿弥には、かつて足  
利義満の勘気を蒙り東国に追放された連歌師琳阿弥が、平  
盛久の鎌倉護送を題材に謡を作り、それを世阿弥が義満の  
前で舞ったことで赦免を得たという『申樂談儀』所収の逸  
話への思いがあったと指摘した。こうした「配流」を題材  
とした「古人」想起は、『金鳥書』冒頭の《若州》の瀟湘八  
景想起によって既に始まっている。

永享六年五月四日都を出で、次日若州小浜と云泊に着  
きぬ。ここは先年も見たりし処なれども、今は老老な  
れば定かならず、見れば、江めぐりくく、磯の山、  
浪の雲と連なつて、伝へ聞く唐土の遠浦の歸帆とやら  
んも、かくこそ思ひ出でられて、

船止むる、津田の入海、見渡せば、く、五月も早く

橘の、昔こそ身の若狭路と見えしものを、今は老の後  
背山。されども松は緑にて、木深き木末は気色立つ、  
青葉の山の夏陰の、海の匂ひに移るひて、さすや潮も  
青浪の、さも底ひなき水際哉、く。

青苔衣帯びて、巖の肩にかゝり、白雲帯に似て山の腰  
を廻ると、白楽天が詠めける、東の船西の船、出で入  
る月に影深き、潯陽の江のほとり、かくやと思ひ知ら  
れたり《若州》全文

北川・多田川・南川が注ぐ若狭の要港小浜湾から佐渡へ  
発つ時、世阿弥が想起したものが「伝へ聞く唐土の『遠浦  
帰帆』」だった。「遠浦帰帆」とは「山市晴嵐」「遠浦帰帆」  
「漁村夕照」「煙寺晚鐘」「洞庭秋月」「平沙落雁」「瀟湘夜雨」  
「江天暮雪」からなる「瀟湘八景」の景の一つであり、一  
日の漁を終えて帆を降ろし、はるばる帰路につく舟々が、  
帆を張って風を受ける夕暮れ時の情景を示す詩画題であ  
る。

詩題としての瀟湘八景は少なくとも鎌倉後期には伝わ  
り、若干は後述のように和歌の題としても用いられた。ま  
た瀟湘八景を障屏画の賛詩とするだけでなく、「近江八景」  
や「金沢八景」など、国内の景観を瀟湘八景に見立てて賞  
美することもあった。瀟湘八景は和漢の文学・絵画の交流

の接点であり、それは謡曲の情景描写としても利用された。  
たとえば世阿弥作とされる《蟻通》は「瀟湘夜雨」「煙寺  
晚鐘」を、一對に用いて、雨の夜の静かな社頭の様子を表  
現するのに用いている。

瀟湘の夜の雨しきりに降つて、遠寺の鐘の声も聞えず。  
何となく宮寺は、深夜の鐘の声、御燈の光などにこ  
そ、神さび心も澄みわたるに、社頭を見れば燈もなく、  
すずしめの声も聞えず。《蟻通》

また、禅竹の孫禅鳳（一四五四—一五二〇）の《道成寺》  
が原作とした作者不詳の《鐘卷》では、「煙寺晚鐘」「洞庭  
秋月」に掛詞を用いている。

恨めしの明神や、く。などしもかくは、つげの小櫛、  
恨みかこてば時移り、夕陽西に入相の、遠寺の晚鐘は  
響けども、この鐘は洞庭の、つきたらばこそ聞こえぬ。  
《鐘卷》

この詞章では本来詩題である瀟湘八景に和歌の修辭技法  
である掛詞を適用して、「遠寺晚鐘」「洞庭秋月」は、「鐘を」  
突く（「月」と詞を運ぶ役割を担っている）。

また《羽衣》は後代の能だが、瀟湘八景の和歌を取り入  
れていることが確認される。

風向ふ、雲の浮波立つと見て、く、釣せて人や帰る

らん、待てしばし春ならば、吹くものどけき朝風の、  
末は常磐の声ぞかし、波は音なき朝風に、釣人多き小  
舟かな、く。《羽衣》<sup>20</sup>

傍線部は、冷泉為相または定家詠として伝わった「遠浦  
帰帆」題詠「風むかふ雲の浮き波立つとみて釣りせぬさき  
にかへるあまびと」の挿句であり、春の明け方の三保の松  
原の穏やかな情景を引き立たせるために用いられている。  
瀟湘八景には水辺の自然と人の営為の情景が凝縮されてい  
る。舞台上の状況を言葉で説明する役割を持つ謡の詞章の  
中に瀟湘八景が取り入れられた理由は、その凝縮性にある  
だろう。

さて、世阿弥が小浜の港を眼下に見下ろした時、眼の前  
の光景に「瀟湘八景」題のうち、とりわけ「遠浦帰帆」の  
景を想起したという点には、意味を見出すことはできるだ  
ろうか。

北宋の文人画家宋迪が描いたものに始まる瀟湘八景を題  
材とした画卷が、日明貿易によって日本に輸入され、足利  
將軍の所有となっている。義教・義政に仕えた同朋衆であ  
る能阿弥による、足利義政所有の唐物の目録である『御物  
御画目録』(東京国立博物館蔵)によれば、足利將軍家には  
玉潤、牧谿、芳汝、夏珪らの瀟湘八景画が伝来している。

このうち牧谿の八景画大軸は足利義満の鑑蔵印である「道  
有」の印を持っている。また玉潤・夏珪の八景画は、永享  
九年(一四三七)十月の後花園天皇の室町殿への行幸の際  
の邸内のしつらえを記録した『室町殿行幸御飭記』(徳川  
美術館蔵)の一覧に含まれている。『金鳥書』成立の頃には、  
これら三つの瀟湘八景画の名作が日本に渡り、足利將軍の  
権力を示す御物となっていたことになる。<sup>21</sup>

#### 四、《若州》——遠浦帰帆と琵琶行——

《若州》における「遠浦帰帆」想起と深く関わりと考え  
られるのが、玉潤の『遠浦帆帰図』(徳川美術館蔵)の画中  
の賛詩である。

無邊刹境入毫端　帆落秋江隱暮風  
殘照未收漁火動　老翁閑自說江南

玉潤詩によれば、絵筆の先から広がった果てしない風景  
の中、船は秋の入江で帆を下ろし、夕方の嵐を避けようと  
している。日の残照が消えぬ間には漁火が動くのが見える。  
そしてその画中で、老翁はしづかに「江南」について語る  
のだという。

問題は「老翁閑自說江南」の解釈である。

江南とは揚子江下流の穀倉地帯を擁する地域であり、水

郷の美しい春の情景と多くの古刹が知られ、晩唐の詩人杜牧の「江南春」などによっても名高い。中世末から近世初頭の五山周辺の学芸を反映する抄物のうち「瀟湘八景」に關して堀川貴司氏<sup>(23)</sup>が紹介した、玉潤詩抄物『八景詩』(大分県臼杵市教育委員会蔵)の注釈には、この詩は次のように注釈されている。

(略) 此遠浦ノ、イマダクレヤラス、ハヤスナドリノ火ガ動ゾ。マコトニアリくトシタ、面白キ、景氣ゾ。サテ釣ノ翁ドモガ、江南ノ事ヲ語リテ居ゾ。江南ハ、

梅ノ名処、春ノ時分ハ、面白キ処ゾ。(濁点、句読点、傍線は稿者私意)

江南は梅の名所であり、春に興趣を持つ土地であると説明されている。老翁は秋の夕暮れの水辺で語るのは春の思いでであると解釈されたことになる。

では江南を語る老翁とは何者だろうか。同じく玉潤詩抄物『瀟湘八景鈔』(都立中央図書館加賀文庫)では、「老翁」のことを次のように推測している。

老翁——ト云心ハ、漁火ノ下ニ、老翁ノアルガ、サテモ此以前、江南アタリノ面白カリタルコトハ、忘レガタキヨト云コトヲ、云尽而説タテイノヤウナゾ。又ハ老翁ハ、年ヨリタル漁人ヲ、老翁ト云タカゾ。其ナレ

バ、此漁翁ガ、火ヲ拳テ帰ラントスルカ、又江南ヘムケテ、舟ヲ推出シテ、江南ノ辺ニテ、魚ヲツランカ、此マ、帰ンカト、吾ト独云タ様ナル画ノテイ也。自ト云字ヲ、以見レバ、漁人ノ、江南ヘ行カンカ、行クマイカト、独自云ヤウニ見ヘタゾ。此画ノ模様ヲ不知程ニ、此様ノ義理ヲ、アゲタゾ。画ニ人形ガ、一人ナラバ、老翁ト云ハ、即チ漁人デアラウゾ。又二人アラバ、老翁ハ漁火ヲ拳テ、動ク者ノ外ゾ。詩ニモ、(；略)(濁点、句読点、傍線は稿者私意)

これは玉潤画の実物に接したくない人物による注釈となるが、「老翁閑自説江南」の解釈としては、①老人が漁火の下で過去に訪れた江南の興趣をなつかしむ、あるいは②老いた漁師が舟を江南に向けるべきか否かを自問する、という二つの可能性があるものとしている。実際の絵では船の上に二人の人物が描かれており、いずれの解釈も可能である。ただし江南が春の名勝地と捉えられていたことを考えれば、江南の春の思い出を持つ老翁が、「秋江」の夕暮れに語るという①の解釈は、この詩の抒情的な印象をより鮮やかなものにする。また《若州》はまさにそのとおり、人生の盛りを思い出す老翁の姿を描いている。世阿弥が玉潤の瀟湘八景詩画を知っていたことが逆説的に示されるの



ではないか。この玉潤の「遠浦帰帆」の画賛詩は、老境に配流の身となった世阿弥が、その自己像を投影した作品である『金鳥書』の嚆矢にふさわしいものだった。その所有者が足利義教であることも忘れてはならない。

つづいて『若州』が示す不遇の老翁のイメージは白居易である。「青苔衣帯びて、巖の肩にかゝり、白雲帯に似て山の腰を廻ると」とは、『江談抄』第四の都在中の詩「白雲似<sub>(26)</sub>帯<sub>(26)</sub>圍<sub>(26)</sub>山<sub>(26)</sub>越<sub>(26)</sub>」、青苔如<sub>(26)</sub>衣<sub>(26)</sub>負<sub>(26)</sub>巖<sub>(26)</sub>背<sub>(26)</sub>」に基<sub>(26)</sub>づく<sub>(26)</sub>箇<sub>(26)</sub>所<sub>(26)</sub>だ<sub>(26)</sub>が、この詩は俗説で白居易の詩とされており、世阿弥も『白楽天』の中で、唐から来た白楽天が住吉明神に挑みかける詩句として用いている。

ワキ「略」いやその儀にてはなし。いでさらば目前の気色を詩に作つて聞かせう。青苔衣を帯びて巖の肩に懸かり、白雲帯に似て山の腰を圍る。心得たるか漁翁」

シテ「青苔とは、青き苔の巖の肩に懸かりたるが、衣に似たると候ふな。白雲帯に似て山の腰を廻る、面白し面白し。日本の歌もただこれ候ふよ。苔衣着たる巖はさもなくて衣着ぬ山の帯をするかな」

これに続く「白楽天が詠めける、東の船西の船、出で入る月に影深き、潯陽の江のほとり、かくやと思ひ知られた

り」の典拠もまた、白居易の元和十一年(八一六)の江州刺史への左遷の折の『琵琶行』である。かつて長安の名妓であった女の船中での演奏が一同を圧倒し、演奏後の水上に沈黙が広がる様子を描写した「東船西舫悄無<sub>(27)</sub>言<sub>(27)</sub> 唯見<sub>(27)</sub>江心秋月白<sub>(27)</sub>」の引用であり、配流の旅立ちの地である小浜湾が、白居易の見た光景と一体となっている。「昔為<sub>(27)</sub>京洛<sub>(27)</sub>聲<sub>(27)</sub>華<sub>(27)</sub>客<sub>(27)</sub>」今作「江湖老倒翁<sub>(27)</sub>」(『和漢朗詠集』下・老人)という白居易像を、過去の榮華からかけ離れた境遇に至った世阿弥自身に重ね合わせる目的が窺える。

《若州》では、このように眼前の光景から、詩画の世界である「唐土の遠浦の歸帆」「潯陽の江のほとり」を想起し、そこに一人の水辺の老翁像を結んでいる。そしてその世界を「かくこそ」「かくや」と感得した時、謡の主体である世阿弥が、その老翁像との一体化を果たすという、特殊な謡の構造を形成しているのである。

## 五、《時鳥》——為兼の佐渡配流と伝承

《時鳥》は、歌人京極為兼(一二五四〜一三三二)の逸話と、佐渡での世阿弥の実体験とが、八幡信仰の下で融合した謡である。

京極為兼は永仁六年(一二九八)からの五年間を佐渡で

過ごしている。その原因は、両統迭立への干渉とする説が有力である。

参拝した八幡宮で為兼の佐渡での逸話を知った世阿弥は、共感に涙している。

さて西の方を見れば、入海の波白砂雪を帯びて、みな白妙に見えたる中に、松林一むら見えて、まことに春六月の気色なるべし。この内に社頭まします、八幡宮勸請の靈祠也、されば所をも八幡と申。敬信のために参詣せしに、爰に不思議なる事あり。都にては待ち聞きし時鳥、この国にては山路は申にをよばず、かりそめの宿の木末、軒の松が枝までも、耳かしましきほどなるが、この社にてはさらに鳴く事なし。「これはいかに」と尋ねしに、宮人申やう、「これはいにしへ為兼の卿の御配処也、ある時ほととぎすの鳴くを聞き給て、鳴けば聞く聞けば都の恋しきにこの里過ぎよ山ほととぎす

と詠ませ給しより、音を止めてさらに鳴く事なし」と申。げにや花に鳴く鶯、水に住む蛙まで、歌を詠む事まことなれば、ほととぎすも同じ鳥類にて、などか心のなかるべきと覚えたり。「落花清く降りて、郭公はじめて鳴き、名月秋を送りては、松下に雪を見る」と、

古き詩にも見えたれば、折を得たりや時の鳥、都鳥にも聞くなれば、声もなつかしほととぎす、ただ鳴けや  
く老の身、われにも故郷を泣くものを、く。

《時鳥》全文

世阿弥が八幡宮に参詣して聞いた逸話とは、八幡宮周辺を寓居とした為兼が、時鳥の声に都への郷愁を誘われ、和歌を詠じたところ、その後は八幡社の周辺で時鳥が鳴くことがなくなつたというものだった。その伝承の後には、時鳥の声を求める世阿弥自身の強い郷愁が吐露されている。

《時鳥》について考える時、落合博志氏<sup>(28)</sup>の指摘する《時鳥》の虚構性の問題について取り上げなければならぬ。氏の指摘によれば、《時鳥》の世阿弥の経験自体が、「われにも故郷をなくものを」という最後の一句に示される自身の絶ち難い望郷の思いを表明するための虚構であり、為兼の時鳥の逸話も都での既知の逸話であつたという。これは、氏が同話・類話を見出された三つの室町期資料『古今連談集』<sup>(29)</sup>『横座坊物語』<sup>(30)</sup>『月庵醉醒記』<sup>(31)</sup>や、その他の近世までの諸資料に基づく指摘であり、この話を分析する上で重要である。そのうちの一つ、『月庵醉醒記』の当該箇所は次のようなものである。

一 為兼、佐渡嶋にて、

なけばきくきけば都の恋しきにこの里過よ山ほと、ぎす

この里には、今の世まで、此歌ゆへ、時鳥なかぬ也。里の名をも、「此里過よ」といふぞ。(『月庵醉醒記』)

ここでは逸話の場は「佐渡嶋」とされているが、この点は『古今連談集』『横座坊物語』でも共通している。注目したいのは、『時鳥』がさらに「八幡宮」と場を絞り、歌徳も宮社の周辺でのみ顕われている点である。この為兼という佐渡配流の先人を世阿弥の現在と結びつける上で、八幡宮という舞台設定には、真否の問題以上の重要性がある。世阿弥には八幡信仰をもとにした『弓八幡』『放生川』の作があり、特に『放生川』には、シテである武内神が最後に「四季の和歌」による舞を繰り広げるなど、『時鳥』と通じる部分がある。そして為兼には石清水八幡宮の神託歌三首を釈教歌巻頭に挙げた『玉葉和歌集』撰集の経歴がある。両者の信仰する八幡宮の霊域を舞台にすることで、『時鳥』では和歌に心を動かされる時鳥という存在が現実となり得ている。

そして舞台となった佐渡の八幡宮(現佐渡市佐和田町八幡)は、本文に「八幡宮勸請の靈祠」とあるように、石清水八幡宮の別宮とされていた(『宮寺縁事抄』<sup>32</sup>)。足利義満・義持

らが尊崇し、将軍後継の神籤が行われた石清水八幡宮の別宮を舞台とした点は、『金鳥書』成立の背景事情を窺わせるのではないだろうか。

また、為兼の瀟湘八景和歌が伝存し、それが佐渡配流期の詠作であることの蓋然性も、岩佐美代子氏により指摘されている。<sup>33</sup>世阿弥の能に為兼詠からの影響の形跡は看取されないが、あるいは為兼の存在が世阿弥の佐渡配流における「瀟湘八景」想起の一因であった可能性も残されるだろう。

## 六、《配処》——「配所の月」と「心」

本来は「道行き」として涙に掻き暮れるはずの『海路』は、次のような遠望的な視点を持つ詞章で、主体である世阿弥の主観を除いた謡である。

げにや世の中は、何にたとえん朝ぼらけ、漕ぎ行船の路もはや、幾瀬の波を越えぬらん、北海漫々として、雲中に一鳥なし、東を遙に見渡せば、五月雨の空ながら、その一方は夏もなき、雪の白山ほの見えて、雪間や遠く残らん。なを行末も旅衣、能登の名に負ふ国つ神、珠洲の岬や七島の、海岸遙かにうつろひて、入日を洗ふ沖つ波、そのま、暮れて夕闇の、螢とも見る漁

火や、夜の浦をも知らずらん

たなびく雲の立山や明け行天の砺波山、俱利伽羅峰までもそれぞればかり三越路の、船遙々と漕ぎ渡る、末有明の浦の名も、月をそなたの知るべにて、浪の夜昼行船の、去ること早き年の矢の、下の弓張の月もはや、曙の波に松見えて、早くぞ爰に岸影の、爰はと問ば佐渡の海、大田の浦に着にけり、く。

「広大な国土と大海を仰ぎ、朝ほらけ」「入日」「夕闇」「夜」「明け行天」「有明」「曙」と、一章の中に散りばめられた、日の出から日没、さらに次の日の出までの表現が、福井の小浜から能登半島を超えて佐渡に至るまでの、実際には半月間を要する行程を、あたかも一昼夜の旅路であるかのようにつづらねて綴る。

しかしこうした海上を飛翔するかのような雄大な光景を繰り広げる《海路》から一転して、続く《配処》では、夏の山路を辿る旅人の一視点によって佐渡の景物が語られる。

その夜は大田の浦に留まり、海士の庵の磯枕して、明くれば山路を分け登りて、笠かりと云峠に着きて駒を休めたり。ここは都にても聞きし名所なれば、山はいかでか紅葉しぬらんと、夏山楓の病葉までも、心ある

様に思ひ染めてき。そのま、山路を降り下れば、長谷と申て観音の霊地わたらせ給。故郷にても聞きし名川にてわたらせ給へば、ねんごろに礼拝して、その夜は雑太の郡、新保と云ところに着きぬ。(略)

我之名号の春の花、十悪の里までも匂ひをなし、衆病悉除の秋の月、五濁の水に宿るなる、誓ひの陰もあらたにて、庭の遣り水の、月にも澄むはこころ也。

しばし身を、奥津城処こ、ながら、く、月は都の雲居ぞと、思ひ慰む斗こそ、老の寢覚の便りなれ。げにや罪なくて、配所の月を見る事は、古人の望みなるものを、身にも心のあるやらん、く。

旅路で目にされるのは、紅葉、春の花、秋の月などの非在の景物であり、都と同じ名称の土地であり、故郷と同じ観音による心の慰めである。しかし佐渡の第一夜となる新保の万福寺に到着すれば、「奥津城処こ、ながら」「月は都の雲居ぞと、思ひ慰む斗こそ」と、故郷への帰りを許されない異土での辛苦と孤独に襲われている。

観月による旅人の心の慰撫とは、阿倍仲麻呂以来の心情表現であり、「東路の夜半のながめを語らなん都の山にかかる月影」(新古今集・驛旅・九四二・慈円)などの歌例も多々ある。また「見るほどぞしばし慰むめぐりあはん月のはる

遙かなれども」という「須磨卷」での源氏の心情表現なども想起されるべきだろう。しかしこれは布石であり、続いて源顕基の「配所の月」の逸話を引き、故郷を追放された老翁の最後に到達する心情を描いた末尾にこの謡の頂点がある。

冤罪によって都での日々を捨ててることを望んだという源顕基の「配所の月」の逸話は、『江談抄』『袋草紙』『古事談』『発心集』『宝物集』『撰集抄』など多くの説話集が掲載しており、『平家物語』巻二「大臣流罪事」では、藤原師長が流罪の処分を受け入れた心境を説明するために引用している。

(略) 保元の昔は南海土佐へうつされ、治承の今は東関尾張國とかや。もとよりつみなくして配所の月をみるといふ事は、心あるきは人の願ふ事なれば、おとゝあへて事共し給はず。彼唐太子賓客白楽天、潯陽江の邊にやすらひ給へん其古を思遣、嗚海瀉塩路遙に遠見して、常は朗月を望み浦風に嘯、琵琶を弾じ和歌を詠して、なをさりかてらに月日を送らせ給ひけり。

師長が「配所の月」の逸話とともに、白居易に思いを馳せたと言及があるのは、彼が琵琶の名手であり、熱田神宮で琵琶を奉納するというこの後の展開があるためだろう。

世阿弥が『平家物語』を能に撰取していた事実を考えると、この箇所が《若州》《配処》に影響を与えた可能性も高い<sup>(36)</sup>。また「顕基の中納言の言ひけん、配所の月、罪なくて見んことも、さも覚えぬべし」という『徒然草』第五段の共感にも注目される。正徹本『徒然草』の書写奥書は世阿弥の佐渡配流の直前にあたる「永享三年三月卯月」であり、能勢朝次氏は「世阿弥は徒然草によったものである<sup>(36)</sup>。」とも推測した。『金鳥書』成立と『徒然草』書写時期の一致を考える時、両者を結びつける能勢氏の着想は興味深い。また、佐渡での日野資朝処刑と子の阿新丸の復讐を描いた作者未詳の謡曲《檀風》には、「げにや科なうして配所の月を見る事、古人の望むところなれども、住み果つまじき世の中に、明暮物を思はんより、あつぱれ疾う斬らればやと思ひ候<sup>(37)</sup>」と、『徒然草』第五段と第七段を引用した箇所もある。

兼好の「配所の月」への憧憬は、政治家京極為兼の逮捕を目撃して「あな羨まし。世にあらむ思ひ出で、かくこそあらまほしけれ」(第一五三段)と放言した日野資朝と同時代の人間の感性によるものであった。しかし顕基や兼好とは異なり、『金鳥書』に表現されるのは、事実流刑となった人間の生身の悲しみの心である。不遇を歎く現実の人間の

心を、「身にも心のあるやらん」と表現している。これまで古典世界を能舞台の上で演じてきた世阿弥が、現実の世界でその世界を体験することになった感慨があり、さらにその感慨が昇華され、それぞれ和光同塵、国土創成神話、国土平安を題材とした後半の《十社》《北山》《薪の神事》へと結実していくことになる。

『金鳥書』の主体として、世阿弥は様々な流謫の人々の影をそこに重ね、《海路》では凝縮した時空の跳躍すら果たしている。その一方で、《配処》《泉》では、現実に体験した人間としての心情表現も行っている。『金鳥書』は世阿弥自身の感慨に基づきながらも、自己の現実を超えた作品であるといえるだろう。

## おわりに

以上、作者自身が主体となる異例の小話集である『金鳥書』①《若州》から⑤《泉》までについて、詞章を分析した。老境の世阿弥にとって佐渡配流は、家族や知人との永別の覚悟を伴う異郷への旅となった。また同時に能作者として、これまでの作品の源泉である和漢の様々な和歌、絵画、物語が描いた「配流」のイメージが交響する空間を、我が身によって辿る行程でもあった。

『金鳥書』は制作の状況・意図を探る手がかりの少ない作品だが、その目的は単なる赦免嘆願ではないだろう。自身が主体となる謡を作成するにあたり最初に引用した「遠浦帰帆」と「白居易」とは、古人憧憬の世界への入り口であり、そして心を生身の人間が持つ現実の悲しみへと引き戻すのが「配所の月」である。配流をそのような二つの次元に併せて結実させた『金鳥書』は、晩年の世阿弥の能作者としての骨頂であった。

## 【注】

- (1) 竹本幹夫「世阿弥の生涯 足利義教時代」(『別冊太陽 世阿弥』平凡社、平二二)
- (2) 今谷明「世阿弥佐渡配流の背景について」(『室町時代政治史論』塙書房、平一二所収、初出平一〇)
- (3) 黒田正男『世阿弥能楽論の研究』(桜楓社、昭五四)
- (4) 観世流小鼓家の観世元信が能役者の伝記を集め、承応二年(一六五三)までに成立させたもの。法政大学能楽研究所観世新九郎文庫蔵『四座役者目録』巻上(十八・十九丁)。
- (5) 『能楽古典世阿弥十六部集』(能楽会、明四一)
- (6) 村井康彦「佐渡の世阿弥―『金鳥書』の一考察―」(『芸能史研究』一〇・昭四〇・七)。ただし松廼舎文庫本の世阿弥

伝書はすべて一筆で、校合の結果から越智観世家伝来本に基づく寛政頃の転写本かという。表章「世阿弥と禅竹の伝書」

〔世阿弥 禅竹〕(日本思想大系24) 岩波書店、昭四九所収) 参照。

(7) 佐藤和道編「世阿弥発見一〇〇年―吉田東伍と能楽研究の歩み―」(早稲田大学坪内博士記念演劇博物館二〇〇九年図録 参照。

(8) 底本に題名表記なし。仮題《薪の神事》は思想大系本による。

(10) 吉田東伍『能楽古典 世阿弥十六部集』(能楽会、明四二) にこの一首の底本からの模写を掲載。

(11) 以下、本稿中の『金鳥書』本文には『世阿弥 禅竹』(日本思想大系24) 校訂本文を用い、適宜表記を改めた。

(12) 『和漢朗詠集』では三句「通ふなれ」。

(13) 『順徳院百首』と『玉葉集』では初句「つまぎこる」。

(14) 『高野本平家物語 東京大学国語研究室蔵』(笠間書院、昭四八・四九) より引用、句読点を施した。

(15) 櫻井陽子「世阿弥の時代の平家物語」(『中世文学』六〇、平二七・六)

(16) 『平家物語大事典』(東京書籍、平二二)、竹本幹夫氏執筆担当項目「能」の指摘。

(17) 石井倫子氏はこの琳阿弥の《東国下》を『金鳥書』の復旋

律であると指摘する(「世阿弥―都から佐渡へ」『国文学解釈と鑑賞』平成一六・一―月号)。

(18) 『謡曲集二』(日本古典文学全集34) (小学館、昭五〇) 所収。

(19) 『謡曲集中』(新潮古典集成) (新潮社、昭六一) 所収。

(20) 『謡曲集一』(日本古典文学全集33) (小学館、昭四八) 所収。作者不詳。

(21) 『源家長日記・いはでしのぶ・撰集抄』(冷泉家時雨亭叢書43) 所収「花鳥風月・瀟湘八景和歌」解題(三角洋一氏執筆) 参照。またこの箇所が伝為相作瀟湘八景詠であることについて、既に『謡曲拾葉抄』に指摘がある(久保田淳『訳注

藤原定家全歌集 下』河出書房新社、昭六一参照)。またこれと同一かは不詳だが、鎌倉後期に既に為相作と伝わる瀟湘八景和歌が存在したことが、護国寺本『諸寺縁起集』の紙背文書である康永元年(一三四二)七月六日付眞範書状

に「冷泉黄門為相卿の詠哥」を得たという記事があることから確認できるといふ(堀川貴司『瀟湘八景 詩歌と絵画に見る日本化の様相』臨川書店、平一四参照)。

(22) 『室町殿行幸御訪記』(能阿弥筆原本、一卷、徳川美術館蔵) は根津美術館・徳川美術館編『東山御物―「雑華室印」に

関する新史料を中心に』(根津美術館、昭五一) に翻刻所収。

(23) 年代不明の転写本。堀川貴司『五山文学研究 資料と論考』(笠

間書院、平二三）第三部に翻刻所収。

(24) 堀川貴司氏前掲書第三部に翻訳所収。

(25) 能勢朝次『世阿弥十六部集評釈 下』(岩波書店、昭一九、増補昭二四)以降の諸注で指摘される。また伊藤正義氏は古典集成解題で『白楽天』を世阿弥作、信光補訂の作品かと推定している。

(26) 『江談抄 中外抄 富家語』(新日本古典文学大系32) (岩波書店、平九) 語注。

(27) 『謡曲集 下』(新潮古典集成) (新潮社、昭六三) 所収。

(28) 落合博志「世阿弥伝書考証二題(一)『花鏡』と清家系論語抄(二)『金鳥書』における虚構の問題」(『能研究と評論』一七、平一・一二)

(29) 『宗砌連歌論集』(古典文庫、昭二九)

(30) 『室町物語大成 13』(角川書店、昭六〇)

(31) 『月庵醉醒記』(古典文庫、昭五六)

(32) 東京大学史料編纂所編『石清水文書5』(大日本古文书家わけ4) (東京大学出版会、大三、復刻昭四五)。新潟県神職会佐渡支部編『佐渡神社誌』(新潟県神職会佐渡支部、大正一五) 参照。

(33) 岩佐美代子「京極為兼の和歌・八景歌考」(『京極派和歌の

研究』笠間書院、昭六二)

(34) 「奥津城処」は墓を意味する語で、「奥」に「(身を)置く」を掛ける。山部赤人の『万葉集』卷三「吾も見つ人にも告げむ葛飾の真間の手児名が奥津城処」(万葉集卷三・四三三)や、同卷九の田辺福麻呂の長歌で知られる表現だが、「おくつきどころ」は和歌・散文ともに後世の用例が少なく、観阿弥原作、世阿弥改作かとされる『求塚』でも用いられない。

(35) 石井倫子「世阿弥―都から佐渡へ」『国文学解釈と鑑賞』(平成一六・一一月号)では、『金鳥書』の当該部分が『源平盛衰記』が描く師長の姿が、『金鳥書』の世阿弥の姿と「不思議なほどにオーバーラップする」ことを指摘する。

(36) 能勢氏前掲書七〇〇頁。

(37) 小山弘志・佐藤喜久雄・佐藤健一郎校注・訳『謡曲集 一』(日本古典文学全集34) (小学館、昭五〇)。

【附記】本稿は、全国大学国語国文学会第一一六回大会の研究発表(平成二十九年十二月三日、於富山大学)における口頭発表に基づき成稿したものである。発表の席上および発表後に貴重なご意見を賜りました先生方に厚く御礼を申し上げます。